



東京部会(第150回)記録

日時:	2026年7月4日(土) 15:00~17:00
場所:	慶應義塾大学三田キャンパス 東館オープンラボ
参加者:	26名(会場15名、zoom11名) 申し込み数

1 佐藤英司先生(福島大学経営経済学類)より「仕事とお金を通じた公民的学びへの導入ー小学6年生を対象とした授業実践」の報告があった。

2026年2月に地元の公立小学校の6年生に実施したもの。公民的学びへの導入として、お金に関して、仕事、支え合い、公共性の三つの観点からお金を理解させようとする投げ込み1時間(45分)の授業である。

授業展開は以下の通り。

- ① 事前にアンケートをとる。これは授業後にも同一のものをとり、成果を分析する。
- ② 最初に、自己紹介をかねて大学教員の仕事とお金、その使い方を紹介。
- ③ 次に、仕事とお金の関係に関して、将来やってみたい仕事を尋ね、誰の役に立つのかを問う。
- ④ 身近なお金の使いかを、普段お金を何に使っているかを問う。
- ⑤ さらに、みんなで支えるお金について、学校や道路のお金はみんなで少しずつ出し合って支えるしくみになっていることを説明する。

授業はここまでで、ミッションカードを書かせて、それを発表、共有することで授業閉じるという流れである。

事前と事後のアンケートでは、お金はだれのために使うものだと思うかという問いでは、家族や他者、みんなとの関わりのなかで捉え直す児童が一定数存在していた。

誰かの役立つ仕事の大切さに関しては、事前・事後に変化がなかった。

自分のお金で誰かを助けたり、みんなのためになることをしてみたいかは、まあそう思うがやや増えた。

他者のためにお金の使い方では、まずは身近な人への感謝や支援がでてきて、その延長上として困っている人や公共的なものへの支出することに関して一定程度の理解を示す結果になった。

授業内では、比較的活発に発言が目立ったが、家庭やメディアや課外の学びが、募金や税に関する一定の知識をすでに与えていることが想定された。また、全体として、断片的にお金やその使い道、議論になる点についての知識はあるが、十分なイメージを持っていないことが伺え、今後の課題になるのではというまとめがあった。

質疑では以下の点が参加の先生方から指摘され議論があった。

①生徒の結果をみると児童の理解にばらつきや温度差があるように思えるが、この授業では、何をゴールとして、それがどこまで到達できているのか？みんなで何を支えるお金かまで踏み込んで教えたのか？

②この授業の次にどのような授業を構想しているのか？

③小学校では実際、お金の教育に関して、どのような取組みがされているのか？また、中学校での生徒のお金に関するレディネスは？

佐藤先生からは、

①収入を何かに使うまではやったが、それ以上のお金の循環まではやっていない。みんなで使うのは公共財のイメージで考えている。ミッションカードの中の質問に児童の共通理解ができるようなものを入れている。

②そこまでは考えていない。お金の見えにくい部分に注目させたいと考えていた。



③その学校では体系的なものはやっていないが、投げ込みの外部講師の話は聞いているとのこと。(栗原先生から、小学校の学習指導要領には税や価格と費用は入っているとの補足があった。中学校の松平先生から税を除くと経済を自覚する学習ほとんどない。中三の公民ではじめて習うという意識の生徒が殆どとのこと。)

補足のコメントが河原先生と東証の斎藤さんからあった。

河原先生からは、小学校でのお金の授業では、お金には多様な使い方があること。その事例を沢山あげさせ、自分では何に使いたいかをあげさせる。教師から寄付や日常の買い物などをあげて、お金が回っていることを理解させ、無駄な使い方はないこと、お金は社会とつながっていることを実感させることが大事という話があった。

斎藤さんからは、夏休みの親子経済教室のなかでの講義やボードゲームの紹介があり、自分も経済に関わっているという自覚がえられるような教材づくりなどを行っているという話があった。

② 杉浦光紀先生(都立新宿山吹高等学校)から「夏休み経済教室にむけての授業提案の実践」(見えないものをみる経済学習の試み)の報告があった。

部会前日に実施した、「公共」での授業報告である。授業時間は95分、投げ込みの1コマの授業である。

授業の展開は以下の通り。

- ① 経済とはという一文を書かせる。これは、授業後に同じものを書かせて成果を検証する意味もある。
- ② お店で食べたカレーライスに関わった人をできるだけ書かせる。(生徒が書いたものを撮影し、スライドに撮影して、多くの人間が関わっていることを可視化する)
- ③ 見知らぬ人どうしがどうして、交換できるのか、フリマアプリの例から考えさせる。その際、フリマアプリの利用規約を資料として提示して、トラブルが起きないようにするための対応策を記入させる。

さらに、見知らぬ人と取引ができるために必要な条件を、目に見えるものと見えないものに分けて考えさせる。(生徒が書いたものを黒板にピックアップする)

ここでのまとめとして、市場を支えている基盤(4つの視点)について紹介して、「フリマアプリは〇〇するものである」という一文を書かせる。

- ④ ここまでに登場した生徒の言葉を使いながら、社会を支えるためのキーワードとなる、資源の希少性、交換と分業、つながり、信頼を紹介する。
- ⑤ ここから後半のお金の問題に移り、フリマは物々交換ではいけないのかと問い、物々交換で生じる問題から貨幣の機能をまとめる。
- ⑥ お金の価値を問いながら、お金の価値を定めているものは何か、なぜお金が流通するのかをまとめる。また、中央銀行の役割についても簡単な紹介をする。

⑦ 新聞を配布して、そのなかから、③④でまとめた4つの視点と6つのキーワードに着目して記事をまとめさせる。

⑧ 振り返りとして、冒頭の「経済とは〇〇である」を再度書かせて、その理由を回答させる。

杉浦先生から、抽出した生徒の変化が報告された。

変化のない生徒もいるが、「つながり、取引、信頼に関わる、無数に関わる」などの表現が出てきた生徒もいたこと。ルールのある在り方は、今後、私法や競争について扱う予定であること、課題をほりさげてゆくなかで発想できない生徒もいたことも報告された。ここから経済問題の解決につなげるには、全体の授業構成をさらに検討する必要があるとまとめられた。



この授業に対して以下のような質疑が行われた。

- ① 授業全体の構想の中での今回の授業の位置がわからない。
- ② 物々交換から貨幣の登場の部分の展開をどう理論的に理解しているのか？フリマアプリの事例は適切なのか？
- ③ この種の授業での評価はどう考えているか？
- ④ ②のカレーライスの話から③のフリマアプリにゆくところにジャンプがあるのではないか？

杉浦先生からの回答は以下の通り。

- ① 教科書見直しプロジェクトでの提案のドラフトの、第3講の「取引を支える信頼」の部分に基づいて、金子先生のメルマガでの本の紹介、新聞記事の扱いなどを加味しながら授業を作っている。
- ② お金の登場につなげるためにここでは物々交換をあげて、資本主義の成立条件のような背景で使っているわけではない。違いがあるから交換できるという点で貨幣の仲介機能につなげる意味でいれてある。
- ③ プリントを提出させることで評価できる。夏休み経済教室でもう少し詳細に語りたい。
- ④ カレーライス以外に使えるものがあればさらに考えたいが、カレーライスはよい事例と感じている。

篠原先生から、補足のコメントがあった。

教科書プロジェクトは、今の教科書の記述では経済理解が十分でないという意識から四つの基盤を抽出して、具体から入って肌感覚で経済を理解する道筋を提起している。その具体的な展開を佐藤先生が10講にまとめて、さらにそれをもとにAIで授業案を出力させている。

今回の授業は、第3講をもとにしていると言っているが、冒頭の全体像に近いものを見せて、具体から広げてゆく方法をとっている。教師が教えるのではなく、生徒の発言を拾って、その背景や理論を確認してゆくという実に上手にハーバード・メソッドを使っている。これをもとに全体像の予告として夏休み経済教室に報告してもらえるとよい。

- ③ 夏休み経済教室の申込み状況など、現在の取組み状況を、東京証券取引所の吉村さんから報告があった。6月23日から申込みがはじまり、大阪がやや先行している。ちらしを9000校に送っているのだから、これから増えるであろう。募集に関して御協力をお願いしたい。

以上、今回の東京部会も、二つの授業実践の報告と充実した討論が行われた。

記録と文責: 新井

次回開催予定: 9月に予定だが未定

場所: 慶応義塾大学三田キャンパス

内容: 夏休み経済教室の総括、実践報告など